「北杜夫文庫」紹介

村　田　　輝　　（信州大学附属図書館）

2015年7月、『楡家の人びと』に代表される純文学作品や「どくとるマンボウ」シリーズなどのユーモアあふれるエッセイで知られる作家・北杜夫さん（本名：斎藤宗吉、1927 ～ 2011年）の蔵書のうち、計663冊（加えて絵画1点）が、信州大学附属図書館に寄贈された。北さんの奥様の斎藤喜美子さん、お嬢様の斎藤由香さんのご厚意によるものである。附属図書館ではこれを記念して「北杜夫文庫」を創設し、寄贈資料の保存・継承・活用に努めていくこととなった。

本稿では、寄贈に至るまでの経緯について述べ、「北杜夫文庫」の内容を紹介するとともに、今後の活用について私見を述べる。

1. 「北杜夫文庫」創設に至るまで

北杜夫さんは信州大学の前身校のひとつ旧制松本高等学校の卒業生であり、本学とはとても縁の深い作家である。松高時代の経験を綴ったエッセイ『どくとるマンボウ青春記』はかつて信州大学生のバイブルであった。北さん自身にとっても、３年弱を過ごした松高時代の経験は、人生を決定づける極めて大きなものであった。信州は北さんにとって「第二の故郷」であり、作品にもたびたび信州が登場する。今回の寄贈も、奥様とお嬢様が亡き北さんの信州への格別な思いを汲み、後輩にあたる信大生にもその著作に触れてもらいたいと願われてのことであった。

寄贈のきっかけは、2015年4月13日に、信州大学広報部門の企画で行われた斎藤由香さんと山沢清人前信州大学長との対談である。斎藤由香さんは北杜夫さんの長女で、サントリーの社員であるとともにエッセイストとして活躍されている。リニューアルオープン直前の中央図書館新館２階で行われたこの対談において、斎藤由香さんから、北杜夫さんの蔵書の一部を信州大学に寄贈したいとの申し出があり、附属図書館としてはさっそく寄贈受入に向けて動き出すこととなったのである。この対談の模様は『信大 NOW』vol.93に掲載されているので、ご覧いただきたい[1]。

その後筆者は、４月から５月にかけての２回にわたり、東京都世田谷区にあるご自宅まで、本を受け取りに伺わせていただくという貴重な機会に恵まれた。１回目は笹本前附属図書館長とともに、２回目は信州大学の学生とともに斎藤（北）宅を訪問させていただいた。通された応接間の書架に並んでいたのは、生前に多くの蔵書を処分したにもかかわらず、北杜夫さんが最後まで大切に思い、残していた蔵書であった。

雑誌『天然生活』の記事[2]によると、2011年1月、お正月をのんびり過ごしていた北さんが突然、「よし、本を整理するぞ」と叫ぶと、家族が止める間もなく、何千冊もの蔵書のほとんどを売り払ってしまったという。本を何よりも大切にし、地震があったら危険だと注意をうけながら書物の山の１冊たりとも処

分することのなかった北さんが、敬愛した作家、トーマス・マンに関する貴重な書物ですら、手放してしまったというのである。このエピソードについては、筆者がご自宅に伺ったときにも聞かせていただいた。とても残念なことであるが、その２ヵ月後に東日本大震災が起きたのだから、虫の知らせだったのかもしれないとのことである。

斎藤（北）宅の応接間書架

しかし、そのような出来事を経てもなお最後まで残された蔵書があった。ご自宅に伺った当日には、蔵書の中から信州大学に寄贈予定の本について、書架に「信州」という付箋を貼り、搬出の準備をしていただいていた。書架には、斎藤茂吉関係の本や、親しかった作家からの贈呈本などが並ぶ中で、手塚治虫やちばてつや、白土三平らのマンガ本が並んでいたのが印象的であった。北杜夫さんがマンガファンであったことは有名だが、貴重な蔵書の多くを処分してしまった一方で、マンガ本を残していたことは、ユーモアを大切にされた北さんの性格を髣髴とさせるものであった。

筆者はまた、庭につくられた大きな書庫にもご案内いただいたが、そこには今では入手困難なものも多い北さんの多種多様な著書や、出版社から送られてきたと思われる本が大量に収められていた。喜美子さん、由香さんの案内により、筆者は応接間の書架及び庭の書庫から本を取り出し、箱に収めた。結局、一回で全ての本を持ち運ぶことはできず、二度にわたって信州からご自宅まで訪問させていただくこととなった。残された蔵書の一部とはいえ、いただいた本は600冊以上になり、北さんが初夏のアルプスを描いた貴重な水彩画１点についてもお預かりすることができた。

感謝状贈呈式（左から由香さん、喜美子さん、山沢前学長）

その後、正規に寄贈手続きが行われるに当たり、斎藤喜美子さんへの感謝状贈呈、斎

藤由香さんによる記念講演会、そして今回寄贈いただいた蔵書を中心とした展示会を開催することとなった。中央図書館リニューアルオープンの前後であり、図書館職員は多忙であったが、何とか2015年7月12日の式典にこぎつけることができた。

式典の当日には、寄贈がすでに決まっていた本に加え、ご自宅に1冊だけ残されていたという『どくとるマンボウ青春記』の北杜夫さん自筆署名入り本、さらには北さんが自室で愛聴していたという松高寮歌集のカセットテープの寄贈がその場で決まった。これらの資料は、感謝状贈呈式の場で喜美子さんから山沢前学長に手渡され、由香さんの講演会の中でも紹介された。

なお、寄贈された資料群は「北杜夫文庫」(英名は "Kita Morio Library")と名づけられることとなった。現在、その大部分は附属図書館の特別資料室に大切に保存されており、また一部は一般図書として利用者が自由に閲覧できるようになっている。

2. 「北杜夫文庫」の構成と内容

寄贈いただいた書籍は663冊になるが、そのうち616冊を「北杜夫文庫」として貴重書扱いで保存し、重複本等47冊については一般図書として、利用者が自由に閲覧できるようにした。なお、斎藤(北)宅に残されていた蔵書の全てが信州大学に寄贈されたわけではない。北さんの父・斎藤茂吉関係の蔵書は

北杜夫文庫

山形にある斎藤茂吉記念館へ、また一部の蔵書については地元の世田谷文学館へ寄贈されるとのことであった。信州大学に寄贈いただいた蔵書は、北さんと親しい交流のあった作家からの贈呈本や、北さん自身の多様な著作物を含む書籍を中心としている。この中には、少部数しかつくられなかった限定本、著名な作家の自筆署名入り本、興味深い書き込みのある本、さらには北さんが旧制松本高等学校時代に使用していたと思われる参考書など、貴重な資料が含まれている。さらには、北さんが松本から見える北アルプスを追想しつつ描いたと思われる水彩画1点についても特別に寄贈いただいている。

以下に「北杜夫文庫」の中から、特徴的なもの、特に貴重なものを中心に紹介する。

2.1　交流のあった作家からの贈呈本

「北杜夫文庫」の相当部分を占めるのは、北さんと交流のあった作家たちからの贈呈本である。親しい作家たちが生み出した本を北さんは最後まで処分することなく、手元に残したのである。著者からの北さんへの自筆の宛名と署名、献辞などが記されているものも多く、作家たちと北さんの交流を伝える貴重な資料群である。

この中で最も多くを占めるのは、辻邦生の著書であり、129冊ある。辻邦生は北杜夫さんと同じく旧制松本高等学校の出身であり、北さんとは終生の盟友であったことから、今回の寄贈に当たって、喜美子さん、由香さんからは特別のご配慮をいただいた。これらの著書には一部、出版社から贈呈された本も含まれているようであるが、大部分は辻邦生から北杜夫さんへの贈呈本である。うち46冊に辻邦生の自筆署名があり、6冊にはそれに加えて北さんへの献辞が記されている。献辞の内容はそれぞれに印象的で、北さんと辻邦生との交流の深さ、辻邦生の北さんへの思いを鮮やかに見せてくれるものとなっている。

以下にそれらの自筆の献辞の内容を転記する。

ながい日日の感謝と思いでをこめて -
『廻廊にて』（新潮社、1963年刊））

やっとできました　目がくらくらしながら
『夏の砦』（河出書房新社、1966年刊）

人生風塵の如し　去来する影夢幻に似たり
『風塵』（湯川書房、1970年刊）

かの人を我に語れ　ムーサよ 感謝をこめて
『背教者ユリアヌス』（中央公論社、1972年刊）

年々歳々花相似　歳々年々人不同 昭和四十九年二月
『安土往還記』（湯川書房、1973年刊）

運命の出会いを謝して　一九八三年一月二十一日
『トーマス・マン』（岩波書店、1983年刊）

辻邦生からの贈呈本

また、数のうえでは辻邦生に及ばないが、埴谷雄高、吉行淳之介、遠藤周作、阿川弘之、奥野武夫、宮脇俊三、なだいなだ、倉橋由美子など、北さんと交流の深かった作家らの本が注目される。宛名や署名がないものもあるが、多くは北さんへの贈呈本であると思われる。

この中では埴谷雄高の著書が目立っており、北さんとの対談本も含めて23冊ある。自筆署名入りは７冊であるが、『架空と現実：埴谷雄高対話集』(南北社、1968)には、見返しに自筆署名のほか、「光ありといえば 光ありき．聖書」という献辞が記されていた。

さらには、志賀直哉、川端康成からの贈呈本(自筆署名入り)があり、貴重である。その他にも、ドナルド・キーン、安部公房、江藤淳、開高健、曽野綾子、俵万智らからの贈呈本(いずれも自筆署名入り)があり、北さんの交流の広さをうかがわせるものである。なお、斎藤(北)宅には、『楡家の人びと』を高く評価し、先輩作家として北さんを気にかけていた三島由紀夫からの自筆署名入り贈呈本もあったが、残念ながら今回の寄贈書には含まれていない。

親しい作家たちからの贈呈本

2.2　北杜夫さんの著書

「北杜夫文庫」には、北さん自身の著書も多く含まれている。旧制松本高等学校時代から晩年に至るまでの間の、詩歌、純文学、エンターテインメント小説、エッセイ、童話、絵本にわたる多彩な作品を含む書籍が一望でき、圧倒される。北さんの作品がいかに振幅に富んだ多様なものであったかを示すコレクションである。また、少部数しか発行されなかった限定本や、現在では入手困難な書籍を多く含み、貴重である。

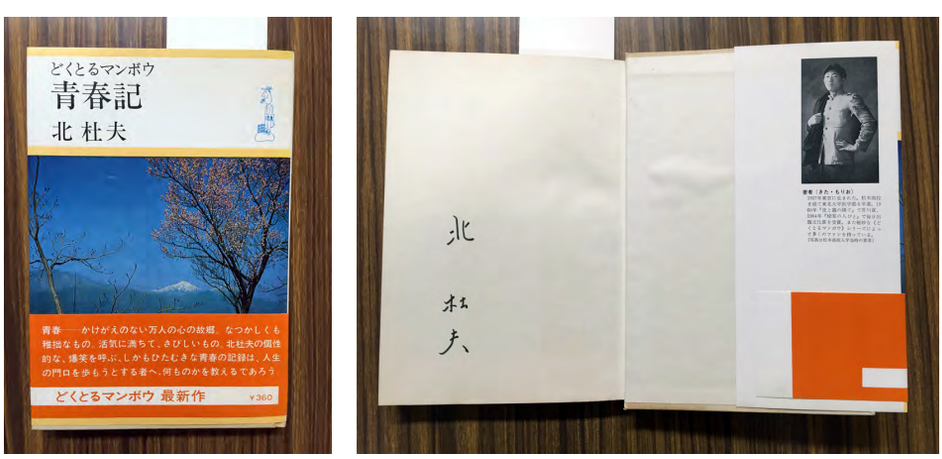
以下にこの中からピックアップして紹介する。

北杜夫さんの多彩な著書

『どくとるマンボウ青春記』（中央公論社、1968）

斎藤（北）宅には、当然、北杜夫さんの著書が多く保管されていたが、代表作や人気の著書については、小部数しか残されていなかった。北さん自身や、奥様、お嬢様から、折に触れて関係者の方に贈呈される機会が多かったためと思われる。

『どくとるマンボウ青春記』もその例に漏れず、ご自宅には１冊しか残されていなかった。その１冊も、北杜夫さんの自筆署名入りという特に貴重なものであった。作品自体は現在でも文庫本で気軽に入手できるものの、表紙の北アルプスの写真が印象的な中央公論社刊の単行本は、現在では入手困難である。そこで、この書籍も当初は展示用として一定期間お借りし、お返しする予定であったが、７月12日の式典当日に、斎藤喜美子さん、由香さんの特別なご配慮により、急遽寄贈いただくことが決まった。



『どくとるマンボウ青春記』と見開きの自筆署名

『どくとるマンボウ青春記』は数ある北杜夫さんの作品の中でも、信州大学とは最も縁の深い作品であり、寄贈された書籍はご自宅にも残されていない北さん自身の自筆署名入りである。信州大学の歴史的な記念品として保存・継承していくべき貴重な書籍である。

『幽霊』著者家蔵本 限定50部の内第4番（中央公論社、1980）

今回寄贈いただいた北杜夫さんの著書の中には、限定本が14冊含まれている。限定本とは、部数を限定して発行する特別仕様の出版物である。しかし、北さんは、多くの読者にできるだけ負担なく著書を読んでもらうことを願っていたため、高価な限定本を出すことをあまり好まなかったという。従って、14冊はどれも元々の発行部数が少なく、希少性が高い。

『幽霊』著者家蔵本

『幽霊』著者家蔵本は、1954年に発行された『幽霊』自費出版本を再現したものである。『幽霊』は北さんの著作の中でも特に人気が高い作品であるが、自費出版本は無名時代に出版され、現在では入手困難な稀覯本である。その後、北さんが有名になってから出版された普及版の『幽霊』とは、仮名遣いや漢字表記のみならず、形容詞や副詞の使い方も異なっている。しかし、著者家蔵本では自費出版本の表紙デザインや原文が忠実に再現されている。

なお、北杜夫文庫に収められた限定本には、これらの他に『狂詩初稿』著者家蔵本（中央公論社、1975）、『少年』著者家蔵本（中央公論社、1971）、『岩尾根にて』私家版（青娥書房、1975）、『さびしい王様』特装本（新潮社、1974）などがあり、どれも興味深い。

“Das Haus Nire : Verfall einer Familie : Roman" （be.bra Verlag, c2010）

北杜夫さんの代表作である『楡家の人びと』のドイツ語訳である。

『楡家の人びと』は、その文学的価値はもちろん、それまでほとんど海外に紹介されることのなかった戦前の日本人の家庭生活を描いている点からも翻訳出版が期待されていた。長篇であるために高いハードルがあったものの、デニス・キーン訳による英語版が1984年～ 1985年に、その後ブラジルからポルトガル語版が、また、ウクライナやチェコでもそれぞれの言語で出版された。しかし、北さんが最も望んでいたのは、ドイツ語での出版であった。この作品がトーマス・マンの『ブッデンブローク家の人びと』に触発されて書かれたものだからである。しかし、諸般の事情でなかなか出版に至らなかった。

その後、サントリー文化財団の助成により、『吾輩は猫である』のドイツ語訳で野間文芸翻訳賞を受賞したオットー・プッツ氏によって翻訳されることとなった。ドイツ語版『楡家の人びと』は2010年に出版され、ドイツ語圏で高い評価を得るに至っている。

なお、「北杜夫文庫」には、英語版、ポルトガル語版、チェコ語版の『楡家の人びと』も含まれているほか、デニス・キーン訳の『幽霊』、イタリア語訳の『怪盗ジバコ』、中国語訳の『牧神の午後』があり、北作品の海外への展開を知ることができる。

「北杜夫文庫」は、文庫本などを除き、これまでに出版された北さんの著書をかなりの程度網羅している。その多くには、外箱や帯などがそのまま残されており、出版された時点の新品同様の状態である。たとえば『楡家の人びと』初刊本の外箱には、三島由紀夫による推薦文が記載されているが、図書館等で

保管する場合には外箱は外されている場合が多いので、実際に目にすることは少ないのではないか。このような観点からも、これらの蔵書には大きな価値があると考えられる。

2.3　関連資料

先にも書いたとおり、北杜夫さんは生前に多くの蔵書を処分していた。おそらく愛好書や、執筆の材料となった本などが数知れず含まれていたに違いなく、残されていれば研究者やファンの垂涎の的になったであろう。北杜夫文庫の中には、失われた北さんの蔵書を断片的に推測させる資料が含まれているので、いくつか紹介したい。

小村實著『最新獨逸文法』（太陽堂書店、昭和17年訂正第12版）

裏表紙の見返しに「松本高校理乙齋藤宗吉」と記されており、北さんが旧制松本高等学校時代に使用していたドイツ語の参考書であることがわかる。裏表紙には四角で囲んで、「憂行」という文字が細く刻むように書かれている。「憂行」は旧制高校時代の北さんが名乗っていた雅号である。なお、松本市の旧制高等学校記念館には、北さんが学生寮の壁に「憂行」と落書きしたものが保存されている。

松校時代のドイツ語参考書（「松本高校理乙 齋藤宗吉」と「憂行」の署名）

『研究レポート』II、III（サンパウロ人文科学研究所、1967-1968刊）

ブラジルのサンパウロ人文科学研究所から出版された研究資料である。アンドウ・ゼンパチの「日本移民の社会史的研究」、半田知雄の「ブラジルにおける日本移民の生活の歴史」などの研究論文が掲載されている。北さんにはブラジル日本移民の歴史を書いた長篇小説『輝ける碧き空の下で』があるが、その執筆に備えて収集した資料であろう。

興味深いのは、これらの資料の見返しに書かれた「宗吉へ」ではじまる伝言メモである。生きたブラジル日系史ともいえるアンドウ氏や半田氏に会って話を聞くとよいとか、出版社に旅費を出させて材料

を収集したらよいといったアドバイスが書かれており、さらに「どうせ書くなら石川達三の小説を破ってニレ家の様にソー大なのを書いてくれ」「事実は小説よりも奇なりと云ふが事実を元にした小説なら奇々怪々位になるだろう」などと記されている。これらの資料を北さんに送った人物が記したと思われるが、北さんの本名である「宗吉」を呼び捨てで使っていることから、親しい友人ではないかと推察できる。北さんは執筆のために収集した資料のほとんどを処分してしまったようであるが、本資料については旧知の友人から送られたものであるので、最後まで残しておかれたのであろう。いずれにせよ、この人物がブラジル日本移民をテーマとした小説の執筆に大きな期待をかけており、北さんも懸命に執筆の材料を収集していた様子がうかがわれる資料である。

『松本高等学校寮歌選集：祝松本高等学校七十周年記念祭』（松本高等学校同窓会、1988）

旧制松本高等学校の寮歌（A 面20曲、B 面15曲）を収めたカセットテープである。斎藤（北）宅から見つかり、7月12日の式典の当日に寄贈いただいた。北さんが自室で愛聴していたものと思われる。収録曲のタイトルリストが付いており、「嗚呼青春」「松高小曲」「春寂寥」などの曲タイトルに赤丸が記されている。おそらく北さんが自らお気に入りの曲に印をつけたものであろう。なお、北さん自身が松高時代に作詞した寮歌「人の世の」（作詞：斎藤宗吉、作曲：松尾先見）も収められており、この曲のタイトルには黒丸が付けられている。松高時代を懐かしむ北さんの姿が思い浮かぶようである。

松校寮歌のカセットテープ

北杜夫さんの水彩画「アルプス（初夏）」

蔵書の範疇には入らないが、ご自宅には、北さんが描いた絵が何点か残されており、今回、そのうちの山が描かれた1点をご寄贈いただいた。タイトルは不明であるが、絵を収めた箱に「アルプス（初夏）」と記された付箋が付いていた。茫洋とした雰囲気の絵であり、スケッチではなく心象風景ではないかと思われる。また、右下に絵筆で "Morio Kita" のサインが大きく描かれている。

なお、北さんは小学校時代、図画が得意だったそうであり、平成元年には銀座煉瓦画廊で「世紀の北杜夫の書並びに絵画展」を開いている。

水彩画「アルプス（初夏）」

北杜夫さん自筆短歌の掛け軸

自筆短歌の掛け軸等

「北杜夫文庫」が誕生して時を置かずに、北杜夫さんと親交が深かった信州大学繊維学部卒業生の平沢伴明さんから、北さんの自筆短歌の掛け軸２幅とエッセイの原稿８枚が信州大学附属図書館に預託された。いずれも北さんから平沢さんに贈られ、ご自宅で保管されていたものである。北さんの蔵書が当館に寄贈されたことを知った平沢さんから、「学生や市民、北さんのファンが見られる機会をつくってほしい」との申し出があり、預託いただくことになった。掛け軸に書かれているのは、北さんが松高時代に詠んだ短歌二首であるが、北さんは毛筆で字を書くことは少なかったといい、貴重である。これらについても、「北杜夫文庫」の一部として扱い、大切に保存・継承していきたい。

3. 「北杜夫文庫」の今後

北杜夫さんは、信州大学の伝統の１ページを刻む著名人であるにも関わらず、これまで本学には記念する資料や物が存在しなかった。その意味で、今回、その蔵書の一部を寄贈いただき、「北杜夫文庫」を創設できたことの意義は大きい。「北杜夫文庫」は貴重資料扱いとなっているため、来訪者がいつでも見られる状態にはなっていないが、折に触れて展示やイベントを行い、北文学の継承と発信のための環境づくりをしていきたい。

独特のユーモアにあふれ、既存の日本文学史に位置づけにくい性格を持った北文学は、多くの根強いファンの存在にもかかわらず、評論家や研究者によって論じられることが少なかった。「北杜夫文庫」創設をきっかけとして、北さんの「第二の故郷」である信州松本において、北文学の研究と情報発信が盛んになることを期待したい。また、そのことを通して、北文学が次の世代に受け継がれ、若い世代にも読まれる気運をつくっていくことは、信州大学に課せられた使命であろう。

かつて信州大学生のバイブルともいわれた『どくとるマンボウ青春記』であるが、最近では読んだことのない学生が多いようである。しかし、しばしば信州松本が舞台となる北作品は、信大生には特に親しみ深く感じられるであろうし、かつての多くの読者がそうであったように、清新で、親しみやすい文章で書かれた北作品は、若い読者に文学の世界への入口を用意してくれるであろう。

なお、信州大学に寄贈いただいた書籍は、北杜夫さんに関する資料の一部に過ぎない。北さんに関わる資料は旧制高等学校記念館、世田谷文学館、斎藤茂吉記念館その他の施設に散在している。今後、

北杜夫さんに関わるイベントを開催するに当たっては、それらの施設が協力する必要があるだろう。信州大学附属図書館においても各施設に資料を提供するなど、積極的に協力していきたい。また、当館でイベントを開催するに当たっても、関連施設の協力を仰ぎたい。特に、同じ松本市内にある旧制高等学校記念館との連携は重要である。

最後に、信州大学附属図書館の「北杜夫文庫」が北杜夫さんとその作品を記念し、次代に継承していく拠点となることを願って、本稿を閉じたい。

注

(1) 山沢清人×斎藤由香「どくとるマンボウと信大生の DNA」、『信大 NOW』93（2015.5）、p.3-6 (http://www.shinshu-u.ac.jp/guidance/publication/summary/2015/shindaiNOW_vol93/index.html)

(2) 「北杜夫さん 本棚の余白から」（特集：本棚は親友）、『天然生活』10巻9号（2013.9）、p.42-47

参考文献

(1) 『北杜夫：どくとるマンボウ文学館：追悼総特集』（KAWADE 夢ムック；文藝別冊）河出書房新社、2012.7

(2) 『松本まるごと博物館連携企画展「北杜夫と松本」展示解説図録』松本市立博物館、2013.7

(3) 『特別展「北杜夫：どくとるマンボウの生涯」』仙台文学館、2015.4